



教育長コラム

体験から学ぶ

✂ 30年後に分かったこと(職人氣質(プロの気概))

学校現場にいたころ、夏休み前の朝会で、校長先生からの宿題として『一生懸命働いている大人の人(プロ)の様子を、じっくり観察してほしい。自分の心(感性)で、プロとして生きる大人の姿から何か一つ感じ取ってほしい。』子供たちにこんな話をしました。その背景には私のこんな体験がありました。



小学校低学年だった頃、お父さんが木地挽きの工場を営んでいる友達の家遊びに行った時のことです。いつも優しい友達のお父さんに、厳しく叱られたことがありました。友達と一緒に工場に入り、危険な刃物を勝手に触ったことが原因でした。黙って工場に入ったこと、刃物を触って危険だったことは十分に反省しましたが、いつも工場では「やってみるかい」「いつでも遊びに来ていいよ」と言っていた優しいお父さんの様子とは全く違う形相が理解できずに、心のどこかに残っていました。

それから30年、教師になり社会科の授業で小田原漆器を扱うために資料を調べ、工場(他の工場)で色々



と取材をさせていただいた時に、厳しく叱られたなどが解けました。

○小田原漆器は、木地挽き職人がろくろを使って木材を回転させ、製品の形に合わせた手作りの様々な刃物を使って切削し形を形成した後、うるし職人が仕上げる

ろくろを使って木地を加工するのが挽き物技術であることが分かりました。

工場の隅には鍛冶屋と呼ばれる場所があり、自分の腕にぴたりと合うまで刃を鍛え砥ぎ、オリジナルの道具を作り上げるのです。

職人の技量は腕と呼ばれますが、刃物は腕の一部であり、決して他人には触れさせてはならない特別なもの、自分の体の一部であり、また伝統を継承する職人の魂そのものであると分かりました。あの時の様子は、危険なことを戒める叱りとともに、プロの聖域を侵された怒り、まさに職人氣質の表れだったということに30年経って気づきました。

人生経験を重ねるうちに子供の頃の体験、気づきや疑問が様々な出来事や経験と結びつき、物事の本質の理解へとつながっていくのです。

それは、心の栄養、生きる力になっていくものだと思うのです。

小田原市教育委員会教育長

柳下正祐



放課後子ども教室

放課後子ども教室は、令和元年度に市内の小中学校全てに設置しましたが、新型コロナウイルスの影響により、令和2年度からは片浦小学校以外の放課後子ども教室は休所していました。

休所中も、感染症対策を講じながらできる開催方法を検討してきましたが、各小中学校やスタッフのご理解・協力のもと、令和4年10月から再開しました。

放課後子ども教室とは



○放課後の居場所

放課後子ども教室は、対象学年の児童であれば誰でも参加でき、宿題や体験学習をしたり、友達と遊んだりして過ごす放課後の居場所です。学校の空き教室等を利用して運営しています。

○子どもたちを見守るスタッフ

宿題等のサポートをする「学習アドバイザー」、児童の安全を見守る「安全管理員」、活動プログラムの作成等を行う「コーディネーター」といった地域の皆さんで、児童の安全を見守りながら、楽しく過ごせるよう運営しています。

～どんなことをしているの？～

学習の時間

子ども教室にきたらまずは宿題や学習プリントをします



子ども達からは「頑張って終わらせたよ!」「わからないことは先生が教えてくれたよ!」との声。

地域の方に講師をお願いしている体験学習

スタッフによる紙芝居の読み聞かせ



真剣なまなざしで聞き入っています。

名人を招いてけん玉教室



子ども達からは「難しい!」「技が出来て嬉しい!」との声。

※好評につき、令和4年度の新規申し込みは11月30日(水)で終了しました。

コロナ禍での再開ではありましたが、多くの申込をいただきました。これからも、安全・安心を第一に、放課後に気軽に寄れる楽しい居場所づくりを目指していきます。スタッフも随時募集をしていますので是非ご協力ください。

◎お問い合わせは教育総務課まで(Tel:0465-33-1731)

